

日本語教育における「表現」と 「コミュニケーション」の可能性

—総合クラス実践から見てきたもの—

河内 千春

キーワード

ホームページ作成 記号 メッセージ 表現 コミュニケーション

1. 〈ホームページ作成〉とは

1999年度と2000年度に「総合」という科目を担当した。1999年度のクラス開始時点では、総合クラス担当教師間共通のコンセプトのようなものは明白ではなく、各教師が手探りで自分自身の考える「総合」を実践していった。その後、担当教師たちが何度も研究会を開き、コンセプトがまとまってきた。

細川(2000: pp. 20~21)によれば、「総合」とは、〈学習者自身にとって具体的な目標を持った活動を軸に、その活動への明確な意思を発信する日本語学習〉であり、〈担当者にとって必要なのは、「何を教えるのか」という内容項目でも「どのように教えるのか」という教授方法でもなく、学習者が主体的に表現するためには何が必要かという環境設定における組織化と支援のための「方法論」〉である。

筆者は、総合クラスの中で〈ホームページ作成〉という活動を実践してみたいと思った。それは、最近の留学生たちを観察していると、パソコンをよく使っていて、メールやワープロの日本語入力には完璧で、レポート作

成の資料探しに WEB サイトもよく利用している。また、他人が作ったサイトを見るだけでは物足りなくなってきた自分のページが持たたいが、具体的にどうしたらいいのかわからないという学生たちが多く見られるようになってきた。それで、〈ホームページ作成〉という活動が学生たちの日本語学習の動機付け・意欲につながるのではないかと考えてみたからである。

筆者は、日本語教育とは教師が文型や語彙を順番に与えて学習者に理解させることだけだとは思っていない。もちろん、学習者のレベルによって、教師の与える部分が多くなることもあるだろうが、学習者自身の表現とそこから始まるコミュニケーションを大切にしたいと思うのである。日本語教育における表現というと、基本的には言語表現、つまり、音声による口頭表現と文字による文章表現ということになる。しかし、実際の人間コミュニケーションは、口頭表現と文章表現だけで成り立っているわけではないだろう。

〈ホームページ作成〉とは、「自分が表現したいと思っていることを文字と画像の一体化した形式の中に作り出すこと」である。それは、日本語で文章を作り、それをホームページ形式に変換して記録のために保存しておくということではない。また、〈ホームページ作成〉とは、学生がひとりでパソコンに向かってキーを打ちマウスを動かすだけの作業ではない。日本語クラスの中の活動としてページを作っていく途中で、また作り終わった後で、教師や他の学生たちとの日本語を使ったコミュニケーションも必要となる。「ホームページ作成という活動を通して、学生たちが日本語による言語コミュニケーション活動を行い、日本語能力を伸ばすこと」である。

そこで本稿では、総合クラスの〈ホームページ作成〉という実践を通して、日本語教育における「表現」と「コミュニケーション」の可能性について考えてみたい。

2. 〈ホームページ作成〉の理論

2.1 記号によるコミュニケーション

池上(1983: pp. 2~3)は、「伝達と表現」、つまり、「コミュニケーション」について、次のように述べている。

〈或る情報を他者に伝達したいと思っている人がまずなさなくてはならないことは、そのままでは影も形もない情報に形を与えて、相手にも感じとって貰えるようにする——つまり、「表現」する(表に現わす)——ことである。「表現」は二つの性質を備えていなければならない。一つは、情報の内容を表わしていること、もう一つは、相手によって知覚されうるということである。そのような両面を備え、表現の役を示すもの——それが一般に「記号」(sign)と呼ばれるものである。〉

また、室井(1999: p. 153)は、「コミュニケーション」についてフルツサーの説を次のように引用している。

〈人間は本質的に「コミュニケーション」する動物である。そして、コミュニケーションを行うことによって、ぼくたちは宇宙を支配する「熱力学の第二法則」に抗してエントロピーを減少させている。つまり、コミュニケーションは人間の「死に抗う活動」なのであり、その結果として作り出されたものが文化や文明である。〉

〈人間のコミュニケーションは世界や経験そのものについてのコミュニケーションではなく、「世界の記号」についてのコミュニケーションである。世界を記号に変換することによって、ぼくたちは世界や経験を理解可能なものに変換しているのだ。その記号とは、言語であったり、視覚・聴覚イメージであったりするわけであるが、単にばらばらに記号が集積されるのではなく、一定の仕方では組織化されることによって、意味として理解可能なものとなる。つまり、記号はシステム化されるわけであるが、このシステムへの組織化の規則を「コード」と呼ぶことができる。〉

つまり、コミュニケーションとは、発信者が表現したい伝達内容をコードに従って記号化することでメッセージを作り、そのメッセージが受信者に達し、受信者はコードに従ってメッセージの記号を解読して伝達内容を得るという活動である¹⁾。

2.2 コミュニケーション・メディアの変化の歴史

コミュニケーション・メディアとは、コードによって記号化されたメッセージを運ぶ乗り物のことである。もっとも原始的な表現のメディアは、主体の身体であり、声である。人間の音声言語は、その複雑性、多様性において、これまでに地球上の生物が発明した中で最高のコミュニケーション手段であった。しかし、一回だけの出来事、つまり、記録性、保存性がない。文字の発明により、人間はコミュニケーション内容を記録し、時間空間を自由に移動させることができるようになった。15世紀の印刷術発明により、文字媒体の複写手段を開発し、一つの情報を地理的に離れた人でも同時に共有できるようになった。19世紀の電信と電話の発明により、音声言語をリアルタイムで遠方に伝達することができるようになり、写真と映画の発明により、非言語的な視覚情報を記録、再現することができるようになった。20世紀になって、聴覚情報のラジオ、視聴覚情報のテレビ放送が始まり、遠方の大量の人に伝達できるようになった。しかし、情報の記録や伝達の方法としては、写真は印画紙に焼き付け、文字は紙に印刷し、音声はテープレコーダーに録音し、映像はビデオテープに録画するというように、別のメディアを利用しなければならなかった。21世紀を迎えた現在、文字も音声も写真も動画映像も同じデジタル情報としてひとつにまとめて記録し、インターネットにより瞬時に宇宙までも伝達できるようになったのである。

1) 記号とコードの関係、コードと文化の関係は、コンテキスト・ノイズ・チャンネルなどの要素と共にコミュニケーション成立に必要なものであるが、本稿では省略する。

2.3 日本語クラスにおける〈ホームページ作成〉

日本語クラスでは、コミュニケーション・メディアの発達に伴って、さまざまなコミュニケーション・メディアを取り入れた教育が行われているが、21世紀となったこれからは文字も音声も映像も一体化したデジタル的活動の可能性が広がっていくだろう。その一例が〈ホームページ作成〉である。

〈ホームページ作成〉とは、「自分が表現したいと思っていることを文字と画像の一体化した形式の中に作り出すこと」と「ホームページ作成という活動を通して、学生たちが日本語による言語コミュニケーション活動を行い、日本語能力を伸ばすこと」という活動であるが、以下のように言い換えることができる。

まず、発信者となる各学生が表現したい伝達内容をコードに従って記号化することでメッセージを作る——記号化——という活動が行われる。メッセージを作る記号は、日本語という言語の文字が中心であるが、文字で書かれた内容だけでなく、文字の形や色や大きさ、背景の色、写真、リンクなどでデザインされたページがメッセージとなる。学生にとって表現とは日本語だけではないのである。もちろん、何かを表現したいと思う時には表現意図というものがあるはずである。表現意図は、表現者本人にはわからないものであり、メッセージの中にはっきりと現れるものではない。それを伝えるためには表現者自身が言語で説明するのがよい方法であると思われる。説明する時期は、メッセージの伝達の前でもメッセージの伝達が終わってからでもよいと思われる。それは、表現者がメッセージの伝達前に表現意図を強調しすぎると、解釈の幅が狭まってしまうからである。

次に、ホームページという形となったメッセージは、FTPという過程を経て、インターネット上で公開される。受信者である学生は、パソコンのブラウザの画面を通してページを見る。つまり、受信者である各学生がコードに従って各学生が作ったメッセージの記号を解読して伝達内容を得

る——記号解読(解釈)——という活動が行われる。ここで、ひとつのコミュニケーションが成立したと言える。記号解読は、それぞれの学生が自分の身に付けているコードに従って行われるので、さまざまに行われているはずである。自分自身が解釈したことを言語化することによって発信者の学生や他の学生たちに自分の解釈について伝えることができる。各学生がそれぞれの解釈について直接話し合うことによって、表現者の意図がそのまま伝わっていなかったり、人によって解釈のしかたが違っていたりすることがわかる。話し合いを続けることによって、学生たちの相互理解が深まっていく。

日本語クラスにおける〈ホームページ作成〉とは、単にページを作ってメッセージの表現を行うだけでなく、表現意図や記号解読についてレポートを書いたり直接話し合ったりして、日本語でコミュニケーションを行う活動なのである。

3. 〈ホームページ作成〉の実践

3.1 メッセージの表現

2000年度秋学期の総合6Eクラスと6Fクラスを例としてとりあげてみたい。この2つのクラスは、学部生や大学院生(正規の学生と科目等履修生がいる)対象のクラスであった。同じ教室(14号館603教室)で授業が続けて行われたために、どちらのクラスも時間のある学生は2コマ続きで出席するようになり、最終的に一クラスとなってしまった²⁾。クラス活動の一つは、「自分が表現したいと思っていることを文字と画像の一体化した形式の中に作り出すこと」であり、具体的には、各学生が個人ページを作成して、個人で公開するという形で実践した。学生たちが作ったホームページ作品の中から学生たちに人気の高かったもの、教師がおもしろいと思った作品を紹介したい。

2) 1999年度春学期, 秋学期, 2000年度春学期, 秋学期のクラス活動の詳しい内容と学生の作品の一部は <http://faculty.web.waseda.ac.jp/kawachi> で公開中。

作品 1: 学生 S 作成の「私と家族」より³⁾

私の家族は大きくて 8 人兄弟がいる。なぜならパパは息子がほしい。一番から五番まで女ばかりだが六番から八番までは男である。パパは音楽家で中国の先生である。暇なとき、子供たちにスポーツを教えた。家は川に近いから、川に落ちないようにみんなの子供は川で水泳練習しなければならない。私の家族は音楽が大好きである。パパは楽器をやっていたとき、子供はパパのそばに立って歌を歌った。……

ページの一番上に「私と家族」というタイトル、その下に両親の結婚当時の写真、それから、上のように文章が始まる。両親の話、3 人の姉の話、本人の話、妹と 3 人の弟の話と続いていく。文章と文章の間に全部で 36 枚の写真が入っている。子供時代のものが多い。S は自分自身について次のように言う。



最後に、彼女の言いたいことは彼女の学歴とバンコクに家を買ったことの二つで親に恩を返すことができたということである。親は裕福ではなくて、子供の教育のためだけに自分のお金を使った。子供の教育に成功できたことは親にとっては一番幸せなことである。その上、親の変わりに、バンコクの家に住ん

3) 学生 S の作品は、背景の色はうすいピンク、文字は明朝体の HTML 形式で作られている。本稿へ引用のため形式を変更した。

でいる兄弟を世話できたから、親は安心できた。親を幸せにしてあげることができたことで彼女をほめたことである。

ページの最後は、現在の両親の写真と

パパ、ママのおかげでありがとうございました

という言葉で終わっている。このページからこの家族の30年の歴史がわかるような気がする。これほどの大家族は珍しい。Sの国タイでも珍しいとのことである。Sは写真を用意するのに、弟の一人に頼んで昔の写真の中から選んでもらった。弟はそれをデジカメで撮り直してメールでSに送ったそうである。今でも仲の良さが続いているのである。家族についてのページを作った学生は他にもいたが、大家族であることがSのページの個性となっている。このページは、専門的な言葉を並べて教育論や親子論について述べたものではない。自分の家族や自分自身についてのありのままをふつうの言葉で語っているだけである。文字数は2500字程度、文法的にも完璧な日本語とはいえない。それでも何か不思議な暖かさを感じさせる。その理由は、「親に恩を返す」「親を幸せにしてあげる」という言葉がさりげなく使われているからではないだろうか。SもSの姉妹弟たちも心から両親を愛しているのだろう。その気持ちがストレートに伝わってくるのである。文章からだけでなく写真からもその気持ちを感じることができる。自分自身の生き方や家族との関係は人それぞれであろうが、Sの素直さが教師だけでなく学生たちにも大きな感動を与えたのである。

作品 2: 学生 O 作成の「王凱水墨芸術の世界」より「雪」⁴⁾

水墨画の「雪」という作品は日本の北海道で描いたものである。北海道の四季の移り変わりは、厳しくもあり、優しくもある。そこに数回スケッチに行ってくるたびに、豊かな自然に感動させられた。その魅力に触発され、絵画という手段で素晴ら

4) 学生 O の作品は、背景の色はブルーの HTML 形式で作られている。本稿へ引用のため形式を変更した。

しい銀一色の世界を表して、個性的な作品を創り上げたいと思うのであった。

この作品の技法としては、伝統的な墨の中に少し寒色という半透明の中国画顔料を混ぜて、北国の一角の寒い景色を描き出したのである。暈す、流す、滲ませるなどの東洋画法を活用しながら、西洋の遠近法を応用する。更に、写実方法を把握して東西混合の意識を強めようとする形而下の観念で時間・空間の中に自我感覚の存在を確立しながら、抒情的に人間と自然との共存共生という非疎外の境界を創り出そうとした。このような意識をもって「雪」という作品を描いたのであった。



美しくも激しく、そして

優しく息づく北国の自然

四季折々に営まれる自然のドラマに

あるものは生命の尊さを学ぶ

あるものは畏敬の念を抱き

そしてあるものは神々の意志をすら垣間みる

学生 O はプロの画家である。この作品は、「王凱水墨芸術の世界」～東洋の筆と西洋の彩による大地と自然の現代美学～と題し、O 自身が描いた絵に日本語で説明を加える構成となっている。ページは表紙のほかに 5 ページあり、それぞれにタイトルがついている。「桂林山水」「雪」「驚涛」「水郷」「江南奇雨」である。表紙ページからそれぞれのページにリンクが張ってある。絵は、一度写真に撮ってからスキャナーで取り込んでいる。O のメッセージは絵という芸術である。漢詩や日本語の詩を組み合わせる表現することもある。また、O は、自分の芸術について日本人に理解してもらうために、日本語で話し文章を書いてきた。ただ、O がほんとうにメッセージを伝えたいのは、芸術が理解できる日本人に限られているようにも思える。O 自身が必要と考えている日本語は、生活に必要な言葉と芸術について語る言葉だけである。しかし、留学生として在学している以上日本語クラスに出席しなければならない。そんな O にとって、従来の日本語クラスは苦痛であったようだ。このクラスで O は今まで自分が表現してきたことをホームページという新しい形式に変換することで新たに表現することができたのである。

他の学生の作品は、「僕は誰か?」「友達の話」「心理学の不思議な世界への探検」「JURA-PARK」「ANNE」「アジアにおける日本文化の影響」「タイ国」「私のホームページ」、自己紹介や趣味、家族、故郷の紹介や日本での体験などである。

3.2 メッセージをめぐる言語コミュニケーション

2000 年度秋学期総合 6E・6F クラスでは、ホームページ作成中もクラ

ス内では日本語が使われていた。教師からの指示、学生から教師への質問はもちろん、学生同士で日本語以外に共通言語があっても、日本語が使われていた。「ホームページ作成という活動を通して、学生たちが日本語による言語コミュニケーション活動を行い、日本語能力を伸ばすこと」の実践である。学生全員がホームページを完成させ、公開に至った後、さらに日本語能力を伸ばすためのコミュニケーション活動、つまり、自分のページ作成の表現意図、「自分が何を表現したかったのか」「なぜそれを選んだのか」「どう表現したのか」と、他人のページの解釈、「他人の作品を見て何を感じたか」「何がわかったのか」などについて日本語で発表し合い、感想を言い合い、それを文字化して残すという活動を行った。

表現意図に関しては、以下のような記録が残っている。上の例であげた S のレポートには「生れてから今まで一番いい印象を受けたことは家族です。子供から今まで家族の幸せなことを思いたいたい時、「私と家族」のホームページを見たら最高と思っている。」と書かれている。O のレポートには「芸術はより自由な発想と精神の表現であり、社会・歴史・人生などを素直に提示し発表することによって新しい意識・観察力・表現力を備えた個性的な絵画で独自の美を表したいというのが私の本音である。」と書かれている。その他の学生たちのレポートには「私は心が暖かくなる話がしたかったです。それで、私が考えた時自分の心が暖かくなるのが感じられる友達というものを話題にしました。」「タイのこの HOMEPAGE を作った理由はみなにタイのことをちょっとでも教えたいです。」「ホームページに伝いたかったのは、アジアの中で日本の影響が非常に深いということである。別に悪いことではないと思う。エシアンアイデンティティー (Asian Identity) が強くなる傾向ではないかと私思う。」ページのデザインに関して「背景の色は、私はピンクの色が好きで最初のページはピンクで、……」「和風らしい雰囲気を作るために、伝統的な文字を使った。背景の色はわら紙を表している。」「このクラスの授業が終わるところは新年とクリスマスの前ごろと思って、ページの表紙にミ

ッキーの写真を入れました。」など書かれている。

また、他の学生のページの解釈に関しては、以下のようなものである。Sのページを見た学生たちの感想は、「Sさんはとても自分の家族をすごく大切にしていることが分かりました。彼女のページを見たら心がとてもあたたかくなることを感じました。」「ご家族は本当に幸福でうらやましい。」「最初と最後のお父さんとお母さんのしゃんが何となく気に入ります。」「Sさんの家族に対する気持、感情がよく分かる。」「かぞくのことにについて色々なことをかいて、あたたかいかぞくと思います。HOME PAGEを見た私もあたたかい気持もうけていた。」などがレポートに書かれている。Oのページについては、彼が画家であることを知らなかった学生が多く、「絵がきれい」「言葉がむずかしい」などであった。友達をテーマにした学生Cのページを見て、「あなたの友達を大切にすることの気持ちは私は好きです。」「BEST FRIEND がいて、とても LUCKY だと思います。」「Cさんは、現代人において何が大事であるかを思って、心の暖かくなる内容を自分のページにのせようとしたみたいです。特に、自分が成長していくうちに友情というものを考えて二人の友達との関係をありのままを素直に素朴に表現したところがとてもすばらしいと思いました。」などがレポートに書かれていた。

レポートを書いた後、順番に口頭発表を行い、簡単な話し合いをした。Sの発表の後には、全員Sの家族の多さに驚き、家族の絆について話し合った。Cの発表の後には、友だちを持つことのすばらしさについて話し合った。また、Oの発表は、レポートに書いた通りの言葉を読んだものであったので、言葉の使い方が専門的すぎて他の学生たちに表現意図をうまく伝えられなかったようだ。この時はじめてOが画家であること、ページ上の絵はO自身が描いたものであることを知った学生もいて、話し合いはあまり盛り上がりなかった。やはり、日本語クラスの活動であることを考えると、メッセージの内容そのものは専門的であっても、内容について説明する時には、他の学生に理解できる日本語表現能力が必要である。そ

れでも、○の絵のすばらしさだけは通じたようである。

作品をインターネット公開できた時点で来なくなった学生も何人かいたが、最後まで出席し続けた学生たちは、自分の作品を通して自分自身について語り、学生同士、学生と教師間の理解が深まったように思える。さまざまな作品があり、さまざまな角度から評価を与えることができるが、単に日本語の文法が正確であるからよいか、心の中にある深い考えを言葉で表現しているから優れているとかだけでなく、言葉は少なくとも、ページを見た人の心を暖かくするような作品に対しても評価したいと思う。これは、クラスが作品公開までで終わってしまうのではなく、言語コミュニケーションの時間があつたからこそ言えることである。

4. 総合クラスの中の〈ホームページ作成〉

1~3 で述べたこと、学生が残したレポートなどから、2000年度を中心に、総合クラスの中の〈ホームページ作成〉という活動について改めて考えてみたい。

〈ホームページ作成〉とは、「自分が表現したいと思っていることを文字と画像の一体化した形式の中に作り出すこと」「ホームページ作成という活動を通して、学生たちが日本語による言語コミュニケーション活動を行い、日本語能力を伸ばすこと」、つまり、〈メッセージの表現〉と〈メッセージをめぐる言語コミュニケーション〉を行う活動である。2000年度の学生向け講義内容(総合クラス全般)を見ると、次のように書いてある。

〈「総合」のクラスでは、半年を通して、何らかの達成感の得られるような具体的な目標を持った活動を行います。参加者一人一人が日本語による主体的な活動の中での確かな日本語表現能力を養い、限られた一定期間にその目標を達成することで、それぞれの問題発見解決の力をつけてほしいと思います。〉

総合クラスの中の〈ホームページ作成〉という活動の中に学生向け講義内容のキーワードをあてはめ、学生たちのコメントを中心に見ていきたい

と思う。

4.1 達成感の得られるような具体的な目標を持った活動

自分のホームページを作ってみたいという意欲を持った学生たちにとって、〈ホームページ作成〉という活動の中の〈メッセージの表現〉は具体的目標であり、これが完成できれば学生たちは達成感を得ることができる。ホームページとは、文字で書かれた内容だけでなく、文字の形や色や大きさ、背景の色、写真、リンクなどでデザインされたページである。自分自身の中に表現したいものがあり、文章や写真などで少しずつ具体的な形に作り上げていく、その過程そのものが達成感へと結びつくのである。達成感そのものは、日本語能力だけに限定せず、コンピューター技術にまで広げられると考えられる。

実際、学生たちの授業開始時点のアンケートでは「インターネットをよく使っているのでもっとたくさんの知識を勉強したい。」「ホームページを作るだけでなく、いろいろコンピューターに関する知識を勉強したい。」などコンピューターについて学びたいという声が多かった。授業後のレポートでは「初めて自分でホームページを作ることができたのでとても嬉しいです。そして誰かにやくにたつともっと嬉しいです。」「ホームページを作るのはずいぶん前からすごくやりたかったものでしたので頑張ろうと思いました。それで徹夜する時もありましたけど全然つかれるのも知らなかったです。」「いろいろ調査したり、書いたり、考えたりして、少しずつ形が見えるようになった時にはとてもうれしかったです。もっともっと自分を表現したいなと思いました。」「ホームページを見ることもむずかしくて私が直接作ったことはとてもうれしかったです。」「以前は自分がホームページを作るとはゆめにも見えなかったんです。ただそれはコンピューター専門の人たちが作るページだと思っていました。クラスに出てから始めてホームページを作るのは私の知識を増えるばかりでなく、知らぬこと、知らぬ知識への勉強の勇気を与えてました。」「私も今度のHOMEPAGE作りが

初めてだったんで、最初には心配しましたが、今はほんとうにこの授業を
とってよかったと思っています。作る間にずっと楽しかったし、自分の何
かが完成になって行くことを見るのはうれしいでした。」など書かれてい
る。

4.2 日本語による主体的な活動と的確な日本語表現能力

主体的活動とは、教師が内容を与えるのではなく、学生が主体的に活動
することである。〈ホームページ作成〉という活動の中の〈メッセージの
表現〉に関しては、日本語の文字表現だけに限らず、学生たちが主体的に
ページのデザインをするものである。文字数の多さや論理的文章を書くこ
となどにはとらわれずに、文字の色・形・大きさ、背景の色、写真や絵、
リンクなどを組み合わせて、各学生が自分自身のページを作るのである。

〈メッセージをめぐる言語コミュニケーション〉に関しては、自分自身
の表現意図について、また、他の学生のメッセージに対する解釈について
のレポートを書き、クラスで表現者の発表を聞き、そのテーマについてさ
らに話し合うなど、積極的に日本語で言語コミュニケーションを行う。メ
ッセージの表現の幅が広がれば、解釈の幅も広がり、言語コミュニケーションも活発になる。これは日本語表現能力を高めることにつながり、それ
だけでなく、学生同士・学生と教師が感情を共有することにもつながって
いく。学生と教師という固定的な関係から人間同士のコミュニケーション
に広がっていくのである。

4.3 問題発見解決の力

2000年度のクラスでは、学生たちが表現したいテーマを決める時に、
教師から特に「問題発見」という言葉は出さなかった。ページを作る前
に、きちんとした言葉で作りたいページについて話させることもなかつ
た。ページを作っていく途中では、教師は学生から質問や相談があった時
のみ対応した。学生たちは漠然としたイメージを持ってページを作ってい

くうちに、内容に関してもページ作成のコンピューター技術に関しても少しずつ新しい発見をし、自分自身の力で解決していったのではないだろうか。

クラス最後のクラス活動に関するレポートを読むと、学生たちが自分自身を客観的に見ていることがわかる。「今回を通じて、ホームページ作りの大変さを感じました。自分が思ったとおりに表現することがどれほど難しいかをわかりました。インターネットで普通に見えるホームページにおおいな時間と努力が入っていることがわかりました。」「ホームページというものは他の人にみせるのが目的だから内容も重要だけど画面構成がもっと重要なことだと感じました。文章も長いより短いほうがよみやすいし、自分の紹介を書いたものには興味をもって読むのがむずかしいことだのを感じました。」「内容面ではうちの家族の個人的な話なので、他人に見せるのはがずかしいけど、私の家族には日本の生活の中でぬかせぬ重要な資料になりました。また、日本に来て、いままでの生活をふりかえて見る反省の時間もなったし、これからの日本の生活をどうすごすかな計画する有益な時間を持つことになりました。」「この授業はとてもおもしろいです。日本語の書く能力を高めるとともにコンピューターの能力を高めます。自分のためにとっても役に立ちます。ホームページを作ることは仕事をするみたいで。計画を立てて、文章を書くこと、写真を組み合わせること、どのように順番にしなければなりませんかとよく考えなければなりません。」「今まではコンピューターとか **HOME PAGE** 作りとかにいつも「こわい」と思って、今度の授業でそれについて自信を持つようになりました。」「私は本当にこのクラスで勉強したものが多くのであります。コンピューターを通して自分を表現してみたいと思ったことが最初のきっかけでした。しかし、この時間を通して自分のホームページをつくっていく過程の中で、自分をどうやって表現するのかわけだけでなく、自分はどんな人であるのかという自己認識と自己認知の方がもっとはっきりしたのであります。私は特に今心理学を勉強していて、音楽や映画、美術にもすごく興味

があって、最初から私のホームページにそのようなことをのせようと目標にして、ついに完成するのができたのです。今度のページをつくりながら、自分でいろいろ調べたりして心理学や映画に関してももっと自分がわからなかったこともわかるようになってとても勉強になりました。またインターネットを通して他の人のホームページも関心を持って見ることになりました。全体的なページの構成や調和など、また、コンピューター技術などにもいろいろ知識が得られました。」

以上のことから、総合クラスの中の〈ホームページ作成〉という活動について次のようにまとめることができるだろう。

- (1) 自分のホームページを作ってみたいという意欲を持った学生が、日本語の文字で文章を書くだけでなく、文字の色・形・大きさ、背景の色、写真や絵、リンクなどを組み合わせて、自分自身のページをデザインする。それにより〈メッセージの表現〉を行う。
- (2) 日本語による〈メッセージをめぐる言語コミュニケーション〉により、日本語表現能力を高める。さらに、言葉を越えた感情のコミュニケーションまで発展させる。
- (3) このような活動から学生たちが得られる達成感は、日本語能力に限定されず、コンピューター技術やさまざまな知識にまで広げられる。

5. 今後の課題・可能性

〈ホームページ作成〉は、コンピューターが使えるクラス環境であれば、「総合」というクラスの中だけで行われなくてもよいと考えられる。例えば、もしも「コンピューターの使い方」というクラスが将来できれば、その中で〈メッセージの表現〉の部分扱うこともできるだろう。「文章表現」クラスの中でメッセージの日本語表現についてのみ注目することもできるだろう。「口頭表現」クラスで学生が自分で作ったページについて発表し、話し合い、レポートを書くという〈メッセージをめぐる言語コミュ

ニケーション〉中心のクラスを作ることもできるだろう。この場合、〈メッセージをめぐる言語コミュニケーション〉が日本語であれば、メッセージの中の言語は日本語でなくてもよいとも考えられる。

これからのホームページは、文字と写真や絵などの静止画のほかに、音声(人の声・BGM・効果音など)や動画(ビデオやアニメーションなど)も簡単に入れられるようになり、ますますメッセージの表現の幅を広げることができるようになるだろう。〈メッセージの表現〉に関しては日本語教師の手に負えなくなるかもしれない。コンピューターの専門家と協力しながらクラスを作っていくことも多くなるだろう。しかし、日本語クラスの活動であれば、〈メッセージをめぐる言語コミュニケーション〉は絶対必要である。

インターネットとは、不特定多数の相手に瞬時に同じ情報を送ることができる道具である。学生が作成したページをインターネットで学外にも公開して、クラスを超えたコミュニケーションの場を作り出すこともできるかもしれない。ホームページ作成技術で手間がかかっている今の状況ではまだ無理であるが、学生たちが全員既に自分のページを持っているか、1～2週間で作り上げることができるようになれば、可能になるかもしれない。不特定多数にメッセージを送るとなると個人情報や著作権などさまざまな問題が出てくる可能性があり、学生たちはページ作成時にインターネット倫理を身に付けていなければいけない。日本語クラスの中にインターネットを取り入れることはますます増えていくと思われるが、日本語教師は、パソコン操作の技術はもちろんのこと、インターネット倫理についてもまだまだ勉強する必要があるだろう。

参考文献

- エーコ・U / 池上嘉彦訳 (1980) 『記号論 I・II』 岩波書店
フルッサー・V / 村上純一訳 (1997) 『テクノコードの誕生』 東京大学出版
フルッサー・V / 村上純一訳 (1999) 『写真の哲学のために』 勁草書房
船津衛 (1996) 『コミュニケーション・入門』 有斐閣アルマ
橋元良明 (1997) 『コミュニケーション学への招待』 大修館書店

- 橋元良明 (1999) 「コミュニケーション行動の多様性」『日本語学』VOL 18-7 明治書院
- 細川英雄 (2000) 「新しい個の表現をめざして——早稲田大学日本語研究教育センター「日本語・総合」実践と試み——」『講座日本語教育』第 36 分冊 早稲田大学日本語研究教育センター
- 細川英雄 (2001) 「問題発見解決学習と日本語教育」『紀要』14 早稲田大学 日本語研究教育センター
- 池上嘉彦他 (1983) 『文化記号論への招待』有斐閣
- 井上輝夫 (1999) 「芸術とコミュニケーション」関口一郎編『コミュニケーションのしくみと作用』大修館書店
- マクルーハン・M / 栗原裕他訳 (1987) 『メディア論』みすず書房
- 村井純 (1999) 「インターネットのコミュニケーション」関口一郎編『コミュニケーションのしくみと作用』大修館書店
- 室井尚 (1988) 『ポストアート論』白馬書房
- 室井尚 (1999) 「解説 / 文化大転換のさなかに——20 世紀末にフルッサーをどう読むべきか」フルッサー・V / 深川雅文訳『写真の哲学のために』勁草書房
- オング・WJ / 桜井直文他訳 (1991) 『声の文化と文字の文化』藤原書店
- 菅野盾樹 (1999) 『恣意性の神話』勁草書房